

医心 伝心

若手医師加入増に向けて

県医理事 金子 敏行

1月26日に、「富山県医師会と語る、新春の集い」が開催されました。91名の参加で盛況でした。毎回、参加者の皆様にはおおむね有意義であるご評価いただいておりますが、一方で参加者が固定化しているような印象も受けます。主催者側としては、医師会および関連団体の活動への理解があまり浸透していない層へのレクチャーとして期待し、加入者の増加につながれば、と考えているのですが、なかなかそうはいきません。「医報とやま」とホームページで繰返し案内しているのですが、一部閲覧できる場所はあるにしても「医報とやま」は本来会員に配布する冊子ですし、ホームページも興味を持たない方は最初からアクセスしませんので、なかなか新規の参加者にアプローチしにくいのが現状です。

また、関係職員と役員を除いた出席者は60名ぐらいと思われませんが、アンケートへの返答15通(これも回収率がもう少し上がるとうれしいのですが)中、医師会について「圧力団体、開業医中心の集まり」と誤った認識を持たれている返答が合わせて6通もあったことは問題かと思えます。

個人的な話になって恐縮ですが、おそらく大部分の若い先生にも共通する状況と思うので私の場合を振り返りますと、私も卒業当初、医師会の存在は全く気にしていませんでした。仕事で手いっぱいでもありましたし、必要なものだとしても誰かがしてくれる、会費もかかるし、と思っていました。結局、医師会に入ったのはある程度責任あ

る立場として富山県の病院に赴任してきてからでした。

入会したのは赴任先の病院の方針で、役付きの医師は全員入会とされていたから(今もそうかはわかりません)ですが、入会してから初めて知ったことがいろいろありました。中でも、もっと早く知っていればと思ったのは、日本医師会の会員になると、同時に会費の一部に医師賠償責任保険の掛金が含まれていて、自動的に加入することになっていたことです。少なくとも当時の若手勤務医はこんな仕組みは知りませんでした。小規模な自治体病院での一人医長勤務や、自信の持てない全科当直など、せめて保険制度がバックにあれば少しは気持ちに余裕ができたのでは、と思います。

この度、県医師会の会費は若手医師枠を別扱いとして安く設定することになりました。また、富山大学の大学医師会も活動が始まるように聞いています。若手の先生がたには、このように自分のためになる側面もありますので、積極的に医師会活動に参加するのは仕事や家庭に余裕ができてからで十分ですので、まず入会だけでもと検討いただければと思います。

この文章も、一番読んでいただきたい未加入の先生方の目には留まりにくいと思います。学生や研修医向けの説明の場を増やしていくよう、医師会も知恵を出していければと思いますし、病院幹部の先生方にも協力をお願いします。